

## 第32回四国透析療法研究会を終えて

中山拓郎

---

夏の小雨から渇水に見舞われつつあった四国四県に、恵みの雨をもたらした台風6号の余波から間欠的に降る雨の中で、第32回四国透析療法研究会が高知市の西にある「ふくし交流プラザ」で平成10年9月20日に開催された。

小松島赤十字病院の渡辺恒明先生の資料によれば、「本会は昭和47年10月に高知で第1回人工透析四国懇話会として20数名の医師のみの参加によって発足し、昭和61年から四国四県を逆時計回りに輪番して開催されるようになり、第27回から四国透析療法研究会（会長：徳島大学医学部泌尿器科 香川征教授）の学術集会として開催され、日本透析療法学会の地方学術集会として認定された。

第32回は高知県が当番となり、医師、看護婦、臨床工学技士、栄養士など430名余が参加して行われた。また、最初は土曜日の午後5時から研究会が開始されていたが、演題数の増加により第25回からは午後1時から開始されるようになった。一般に血液透析は週3回行うことより、土曜日血液透析をせざるを得ず、日曜日に開催するほうが参加しやすいのではないかと考え、また、四国内にも高速道路網が整備されつつあり、各県庁所在地を2～2.5時間で結ばれたことを受けて、今回は日曜日に開催

した。

一般演題として52題が発表され、うち29題（約56%）が看護婦と臨床工学技士による演題であった。今後もこの傾向が続くと思われる。従来、医師による特別講演が多かったが、コメデカル・スタッフの参加の増加を受けて、1題は信楽園病院臨床工学の中村藤夫先生に「水処理と消毒剤の実際」を講演していただいた。エンドトキシン・フリーの血液透析の普及により、長期血液透析患者にみられる合併症も変化するのではないかと思われた。また、導入患者の高齢化と糖尿病性腎症からの透析への導入が増え、種々の閉塞性動脈硬化症を合併する患者の増加に対処するために、もう1題は東京女子医科大学腎臓病総合医療センター所長の阿岸鉄三先生に「透析患者に合併する閉塞性動脈硬化症」を講演していただいた。

最後になりましたが、多くの人の協力と四国四県から参加を得て、有意義な研究会を開催できたことに感謝し、今後、ますます本研究会が発展し透析患者の治療に貢献していけることを願い、研究会の紹介を終わります。

平成10年9月22日